

4. 「学生による授業評価アンケート」全学的観点から見た現状と今後の課題

全学のアンケートの「授業の状況」の7項目で、全学平均が4.2点以上あり、高い数値を示している。「学習の状況」では、(8)「授業の内容は理解できた」の項目で4.2点、また(9)「やむを得ぬ理由以外では遅刻・欠席をしなかった」では4.4点と高い数値を示している一方で、(10)「この科目について授業以外1週間あたり、どのくらい学習しましたか」の設問では、1.9点であり例年と同様、平均1時間未満という低い結果となっている。「学習成果(4年間で育てたい力 ND6)」では、各項目で3.9点以上あり、均整のとれた結果が示されている。

次に授業形態別のアンケート結果では、「講義」「演習」「実習」「卒業研究」の各項目において、4.0点以上の高い結果を示しているが、(10)の学習時間の項目では、授業形態別で結果が異なっている。「卒業研究」では、3.6点と高い数値を示しており、「演習」「講義」ではそれぞれ2.1点、2.5点という数値を示している。一番低い数値を示しているのが「講義」で1.7点であった。講義科目では、ほかの授業形態と比較して、課題の設定やフィードバックが困難であることが本結果と関連していると考えられよう。

開講所属別のアンケート結果では、「共通教育科目」では、各項目において、全体平均点より0.1~0.2点低い数値を示している。「現代人間学部共通科目」では(9)を除いて、全学平均点より0.1~0.4点低い数値を示している。続いて「英語英文学科専門教育科目」では、各項目において全学平均点とほぼ同様の結果であるが、(10)では、2.4点を示しており、全学平均の1.9点より0.5点高い数値を示している。「人間文化学科専門教育科目」では、各項目において全学平均と概ね同様の結果となっているが、「学習成果」(16)「この授業で、『想像・発信力』が向上した」の項目では、4.1点という高い数値を示している。「心理学科専門教育科目」では、各項目において全学平均と概ね同様の結果となったが、(2)「授業中に使う教材(テキスト・配布資料など)は、わかりやすかった」の項目において、4.5点と高い数値を示している。一方で(10)では、1.4点という全学平均より0.5点低い結果となった。「こども教育学科専門教育科目」では、概ね全学平均と同様の結果となった。「福祉生活デザイン学科専門教育科目」、「生活福祉文化学部専門教育科目」、「心理学部専門教育科目」ともに、概ね全学平均と同様の数値を示している。「資格科目等」の「授業の状況」では、平均して全学平均よりも0.1点低い結果を示しているが、「学習成果」の(14)(15)(16)では、全学平均よりも0.1点高い数値を示している。

以上のアンケート結果に鑑みて、概ね前年と同様の結果となったが、前年と同様に、自学自習に費やす時間が少ないという点が見られ、授業時間外の学習時間については、全学的な対策が必要だろう。また、前年に引き続き、各項目で高水準の点数を示している結果は望外であり、実質的な指標としてとらえることに抵抗を覚えざるをえない。今後も授業評価アンケートの実施方法を含め根本的な議論を継続することが望ましいだろう。

文責： 大川 淳 (人間文化学部英語英文学科 FD 委員)